重修新譯蒙賊記

へ13
3328
3

蒙賊記第三

牒使後到筑紫事

さても蒙古王忽必烈は趙彝が辞を深く信じ高麗王へ縁結して度々皇國へ使者を立て以書をもつて和せん一言の返書をだに得ざりけりあれバ金北遺風にて今ハ股肱たる秘書監趙良弼を日本使者の正使として先高麗へ命令し以前のごとく日本へ導引をなすべし且此度ハ忽林赤王國昌洪茶丘等を副将として正使を送らしめ正使の帰るまでハ金州のうちに陣營を設けおき且て軍勢を引率せしめ或ハ兵を發せしむる事なれバ兵粮を始めとして其手當を致すべし舟船等も堅固なるを撰定し陣具を致させまじく

大正十年八月廿九日 寄贈 本大學出版部
へ 13 3298 3

精しく心を用ふべしとぞ下知しけるに高麗王植畏つて承り
譯語別将徐稱校尉金貯に命じて先導せしめけるにかくてかの
使船文永八年九月筑前國今津といふ所に着きたれバ其浦の者ども
軍船と心得て一時に騒ぎ立混乱をぞ生じたるが宰府にありし
騎兵數多の士卒を押出し軍船の用意兵革の備へをそなへつゝ此
陣場を配りて寄せ来りしが討れんと勇をつくみて待ち居たるに
軍船にはあらざりけるにや牒使を下し宣あるに出て子細国につかえ
なる事權に今の藻を云所國めく巌重に守護をなし太宰府に至て
来るにける我朝廷勅命両方して使者の来るを聞ぬれバ趙良弼
答えて曰今我等牽しなる事權ハ我國皇帝より上國の王子になる

國書なり是を使節を立て以前にも云来りし御書を給ふ
ありし事なれバ國王深く悼りて君命に従ひ年しめらるゝて今度ハ
巌重に守りて中にも附しめてかかる躍をさしめて某使に示して京都へ持参し出雲子
王子に立て其を成り付ぬ時ハ随分子委く之を聞き将軍へすぐに
相語し叡聞に達しまゐらせ其時ハ此事權ハひとく命じて
我皇帝ハ宣命を擬しく今叙位を來てるうされど京都よ
急ぐべき先導をせしめるん事今日の要務なる其某京師に
急ぎる事なるバ使節を立てる論すれど此時に事權をもち
帰伏し是我皇帝の勅命なりと思ひてハ京都まても
所以覚悟のある事なく上國の命運も此東いゆるがんと

億萬の生靈のために深く歎き給ひと威風凛々として
ほこる戎狄を拂ひ弁舌凄くぞ述べける蒙賀の使く其趣を鎌倉へ
注進して急ぎしく時日を經る程に頻に先年使を立てまゐらす
を條便さて催促せらるゝとく鎌倉より命令もなくて都に入るべき
事とも叶はねばもとより許さぬぞ紀にあらざればつゞく蒙賀は國書
交接の辞をつくしければ夫子も云ぞや其國に入る時其國の制度を
問ふとかや先づ皇國の法律には神明の人種として帝都へは入れ
ざりしまゝに書翰を渡されて鎌倉將軍家の命令を待ちてこそ
國の基律なれと撰らみやぶ術されけりぞ稍良郷積み置て
くさらば止むとなさるゝ事とて我皇帝の嚴命あればぞ事

こゝにて返しがたしと門客をば集めむとてやがて封せり付然
而しけるに蒙賀是を見て家の子郎等を召集へ披封せしめて
讀しめるに其文面は勝國とて高麗國へ命ぜし一家の條件を
極めたれど本國と近き鄰の事なるも先の日に使者を遣はし好を
結ばん事をも乞ふ西國の下吏を偽らしは其意を盡さる年舘
しく又彼に帰る事あり其の奇は貴國の對馬國の下民を二人連れて
帰りたれど其者ども面謁して事の意趣を語り聞かせ能く
合点致させて其後送り帰して附書状を添て差し出すにより
返事もあるべけれバ引續て使者を差向ずべくおもひ給ふなる麗
の權臣林衍が者謀るとおもひしなれバ其發動に乱れ起りて

其使におけるハ定めて知る貴国にても是等の事を伝へ聞べく
辺遠の者とおもひたがへて捨おかれし事やらん あるひハ文書をへされし
彼賊どもにさゝへられて途中にて滞り届かで成ぬる事やらん
素より目なきて礼儀を知れる国の中にかく不挨拶なる事をや
あるが中にも近比林衙をも討滅し其乱も静まりぬれバ少中大夫秘書監
趙良弼といふ者を正使として書翰を持しめ来たれる上ハ
差副て来らくも使を立て隣国の好みを修めまでて国々
美事とするもの也べし 懈怠して礼儀を失ひ干戈を用ゐるに及ぶそ
好まれぬ事なりしかバ其趣に書せり 受来る是は聞て
聞かぬるもあまり悪しきにて差継たりたる豈に許容のなかるべけんや

殊に今度の使におゐては趙良弼といふものハ眼ざしも凡ならず応対
ことに趣ある筆人と見えぬるにかゝる遠境に使まゐらするハ定て
勇智の者なるべし 猛勢の使なる時目を移して其国の地理
風土を窺ひ知り人気の厚薄を察せば後日戦闘に及ばん時
必便ある事あるべし 速に放ちて此湊に滞留
をゆるさぬこそ能からめとて其由いろにあらはし申されけれど郎等
一議にも及ばずして君の正策不省せり殊に執権の厳命の今に
至りていづれんぞ奏するのあるべきん 速に此旨を申さし
追返す事叶ふべしと評議して決せしかバ翌日趙良弼等の
使節を召出し京貢も渡されけるにて其日召され国書の返

某披封熟読せしより年来約束変らぬ修好の事なり抑此一事ハ
おのくハさきにも評定ありし旨ふくしぬ勅使へ申されど能く
使節へ申含めく無益ならむの事なれども御言成行よして利
害を申述ふるしも一旦帝安撫せる詔使を豊再應申述せん
や海をいだしや我皇国の天皇の倫言を汗のごとしとは倫冬れ
将軍家甚偏ふ然許ありく命令を下されバ此一云ハ駟馬も
及ばずといふも修好をおけらねバ早く此表をお帆むへしと卿ら
杼縁の事をいふまでく断然としく申渡されあきバ趙良弼も漸
あんしは兼ておもひし事なれど余りの事ふ悪をさまし此上ハ
せん方なしく早く船ふ立帰り纜を解んとするに九州の猛者ども

中合ひく互ひけるもいでや此使ふ連立て彼がまを押渡り虚実を
糺し兎角を探りく所よりたゞ對論しく彼が不遜を懲しめ
我国の武威を示し国家の恥辱をはらんとて廿六人打連れ彼使船
のそとに押寄よ乗込事然積めバ趙良弼思ひも寄ず皆ぬん
いか作よ取ふして己が船ふぞ乗せうりけれかくて趙良弼ハ言葉を
帰郷うつ此国ふく相まふ此度ハ列底兵族王命をうけく都を
り発せしものを空く帰もるく帰ふまく王の怒やいかるべんさり
とく彼邦の主旨を能く熟察するともて伏従する事なりしず
くしさらば此地ふ止まりまづく張禪を都ふ生し王の様嫌を
窺ひ志ある日なんなせもそ事ふつけく都ふ連く来りしめバおし

怒も解ぬべしと委しく張澤に云含めて彼渡りて来りし廿六人を
引つれさせ本國へこそ送りしなれ彼者ともハ國都に至り思ひ設け
し其所まてハ土地風俗に眼を配り形勢を鑑察し張澤に従ひて
其く何卒一度大王に謁見せまく欲て遠路を経るひ来りしも
此願ひのかなはざれバ猶よく執成し給れよと再三是を頼みければ
張澤ハ趙良弼が事に云含めし機密やあるけん同僚の向に言を
猶よく執成し御前へ召出されて親しく此れ何れん事なかりし
かくて中入来り蒙古王是を聞く事ぞ怪しき謀臣等を召集め
異見を問ひける中で曰今此事情を察するに此度来りし日本の
使者ハ王の使にてあらざるべし通辞北記者もなくして却て朕に

謁見の使を差越も事やあるべき是全く従事にあらじ
汝等いまだ知らずとぞ姚樞許衡などいへる智勇兼備の
謀臣に言しく對へけるは此何れも聖慮のごとくにて彼
日本ハ神皇正統の神別なりとて夫のごとく驕り傲りて此度も
けるもの武術をたのみて小國の悲しきまで天兵に抗敵せんと
兵力なけれとぞ恐惶の心更に深くして我朝の強大なる軍勢の
熾盛なる虚実を知らむ為にて政府をおとしめ又ハ己れ
意にまかせ國の為に身を顧みず勅使に従ひ来りしか何れも密使
九るしべし其骨柄のたくましきも間者に紛れなき事ハ陛下の
聖慮のごとくなれバ謀ハ密なるを貴ぶとも申せども軍政に

一機會仮令漏闕ことあらんも何程の害かあらん恐るゝに足るべからず
されどもかゝる匹夫を麁忽に禁闕へ召入て天顔を拝せし
給ひしは豈にしこりなからんや此事ゆめ〳〵許すべからず左右の
良策ハ陛下の知しめす所なりとぞ申ける蒙古王是を宜
しく寛大なる徳風を示し強大なる武威を張り仁慈恩愛を
飾りたて會釋ひて城中に入れ久しく留めて益なしと
旬月すごして帰使の役なる康史部をして其背に送りしかど
遂に皇國へ至し届けたる
文永八年に 彼の至元八年 蒙古王忽必烈國號を立て元と號せし
是則易経の乾元の義を採りけるなりされどもまだ皇國に

始めて書状を奉りし蒙古の国号なりこれぞ弘安の乱
起りて此後も元の名を改めず蒙古とは書しなり
讀人其意を得べし

趙良弼再来大宰府に至る事

扨も少貳三郎左衛門尉景資は蒙古の使臣趙良弼が捧来りし
國書の写文意惣の始終をば詳に書面にして鎌倉へ注進
しければ執権是を熟覧して太宰景資が指揮を感じ将軍家へ
披露ありて其使者を返さるべく申付られけるが今度渡来
せし蒙古の使者速に追返しければ将軍家深く御感あそばされ
されば我国をいさゝかも油断せざりしが果して此後又も来朝

ある事しあらば早馬を以て早速注進すべきよの幕府より仰ありて仰合されたる事なれど甚湊に止宿して堅く守護を申付て注進するぞよろべきこハ此度の兵船の悪しきなハ驚かし別に四名の英傑あるれバ此旨紀書を以てべしとるすしと御教書をぞ下されける斯く鎌倉より相模守時宗深く蒙古の無礼を憤りやまず言ひし言のごとく大挙して我国に兵を寄なバ一挙に是を撃破り我鎌倉の征夷大将軍の威武を異域に知らしめんと武備の設をなし諸国の軍兵を点検し時の六波羅北条式部大輔時輔治部大輔義宗に命を傳て九州二島の守護地頭鎮西大友太宰の少弐菊池原田秋月波多江宗紀伊の

一族臼杵戸次松浦党大村諸所五島児玉党を初として大名小名御家人多く蒙古の軍船襲来せば年来練磨の勇武を以て速に討て奴原軍功を立忠勤を励むべしとの命令をいと厳に觸まはしけるにぞ諸家以前にも勝まさりて戦闘の用意頻りにして何国の浦々に至るまでも鏖殺にして呉れんものと手ぐすね引て待かけたりしと実にも勇しき事どもなりさても蒙古王ハ文永十年三月高麗に止まり居る趙良弼に命じて曰へ汝風波の難を凌ぎ遠く使を勤る事既に労苦なりといへども終に其功を立ず日本の服ひ従せざるハ汝が忠節おろそかなるにあらねど彼国の頑愚なるなり今一度彼地に至り鐵くく諭し来るべしとぞ命じけり

趙良弼畏くも纜を解おろし高麗を出帆し月を経て
やうやく筑紫の国に着けるにぞ博多の湊より早馬を以て鎮西へ注進し
ありければ北條相模守時宗朝臣是を聞て京都へ使をもて六波羅より
禁廷へ奏聞せられけるに此卯年頃蒙古国の返牒を求させ
来しるにも数多度使を差越し無礼の言辞を述べたる返牒をえらべ
帝の勅にまかせ其使者の挙動武威に誇りて貢使の趣をわすれ
我朝を窺ひ往返するよしなれば表は信使といふとも実は察する所書
偽りて話し我国の風俗地理を見て其の隙を窺ひて軍を起して
攻来らん謀計なるべし譬へば燕雀同じく巣の小狄
となしべからく我皇国を侮りしは悪むべき奴原の挙動にこそ

首を刎て我国固有の神武を示し後代までの掟にこそ仕つめと
奏聞せられければ禁裏においても廷議ありて鎌倉よりの奏達は最の
事なれどもこのたびの使者等悉く斬罪せばそれと通ぜざる者なく
しく何の縁にも知るまじかりし国に此度までも来し其趣を知らしめん
為に終をゆるして帰すべしとぞ勅諚ありければ鎌倉にても
違勅に及ばれず其趣を太宰府へ申遣はされ重ねて渡来せる
あらば是を一人も生けては帰すまじと其旨国王へ告げ来たれ
返しとぞ申渡されたる趙良弼等もろく禁然として帰路し
五三日の滞留を乞ひつて其後帰帆しけりとかく此趙良弼は
素より事あるべしと思ひ設けし事にして此年須く高麗に

滞留してまつるは我朝国の強弱をはかり時変の機会を待ちて且元蒙よりの海路の有様不審なりしもあらざれど遠近浅深を測定め其心しきりて帰りけるが今一度日本へ押よせ彼邦の地理を窺んと思ひ居たりし折柄に王より命令ありけれバ来てまた帆し博多の浦に着くより一通の使節の言を述べく返事をお待つ緩に深く地理に心を砕きことごとく探索測量して今や帰帆とおもふおりしも太宰府にて滞帆を免されめ旨申渡されけれバ心中に喜悦合ひて仕舞しつゝいそぎ纜を解きて蒙に着船し蒙古の国都へ帰り着き忽必烈に始終且海路地理測量せしを委しく申述しけり蒙古王歓んで

深く其備を感賞し専ら軍馬を起して征伐すべく思ひ定めたれども小国の日本なれバ兵車の力を用ひずして容易く中途より忽ち帰化陸役いたすべしと謀りしは頑愚の君なる哉何のとも為しがたしさりとて一書不せめ滅ぼして天罰彼者にしかる者とぞ申ける

蒙古勢掠の事

文永五年三月に鳳州経略使忻都高麗軍民総官洪茶丘両人に命じて日本国へ使者を遣し速やかに降参いたされども返翰をも持せずして甚驕傲不遜にて無礼の挙動に至のみならず勅使を侮蔑して恐る事は臣僕のごとくしけるよし

捨置がたし悉く責亡し我属國となしはてゝ自ら扱ひし
破滅の罪を天に代りて糺さんと先大小の軍艦九百餘艘
軍兵十万五千人を募り七月にいたり奏を出陣なさしむべし其旨
篤と相心得を用ひて勤めよとぞ申ける忻都洪茶丘ハ諸伏
して聖旨の趣畏りたてまつるとて日本に兵乱論ずるは條あり此道饒
増兵にいたらぬ十分に軍馬の用意して日あらずして出陣し
立所に彼國を攻破り皇帝の武徳をしめさんとぞ答へ
けれバ又高麗に使者をさして申遣ハして曰貴卿も惠て力を
用ひ兵を教導せしむるまで日本國王國隨ひてさらに帰化する
心なく且王威を憚らず蔑如する事恭順なり今何ぞ

閣なん國ハ兵士壹万五千人を發し征伐して其罪を糺さんとす貴卿も
加勢を致さるべしとぞ申ける高麗王答て曰王命更に違わず
謹で承けたまはりぬと急ぎ兵を下さるべし小國も用意を致すべし
とて都督使金方慶を中軍の大將とし樞密院副使金侁を左
軍使とし上將軍金文庇を右軍使とし其勢八千餘騎をことごとく
率ゐて三翼の陣を設けて加勢すべくぞ備へなせるされバ高麗王
植も皇國に敵對して戦争すべき心なく止事を得ずして案内
して書翰をも送りしが抑も兵馬を用ひざる紀事を知らしめん
とて不便利なる海路を連れ歩り波風あらき瀬をこえて
日数を多く費しける我當古の國居日本通事曹介升と

此者此事を以ふかゝりて蒙古王に申て曰高麗らの案内ハ心得
ぬ事にて我々ハ彼松浦辺より出帆なし風の都合宜しく節ハ百日を
過さずして日本へ渡る筈 然るに何時ならしも数月を送り海路に
手延致す事日本にて籠城して兵馬を用ひずして紀旨知りする
為なり若後日本軍を發し討手を下しなば時ハ彼高麗へ案内させ
致させむし小臣是が先導を仕らんとぞ申しけるを高麗王後々
備へなく大臣辞り紀今御身にても蒙古王の心に縛る事あらば彼妙案
勢ふまりせて国危きところの日本我國きまづ我國に討手を向給ふ
日本に合戦をとも海外の事なれば援兵を頼みがたし所詮
國家の安危をはかりて近紀蒙古に從ひて遠き日本を討べし

志さけて心ひとつに思ひ定めて加勢の備を設けしかば同四月
蒙古王の趣大将都元帥忽敦右副元帥洪茶丘左副元帥劉
復亨等数万の勢を引率して高麗國に来りて諸方の勢を集
採へて纜を解き于渡り日一撃に本を落さんと手を揃ゆる
形勢は勇ましくも又恐ろしかりけれ

対馬國合戦の事

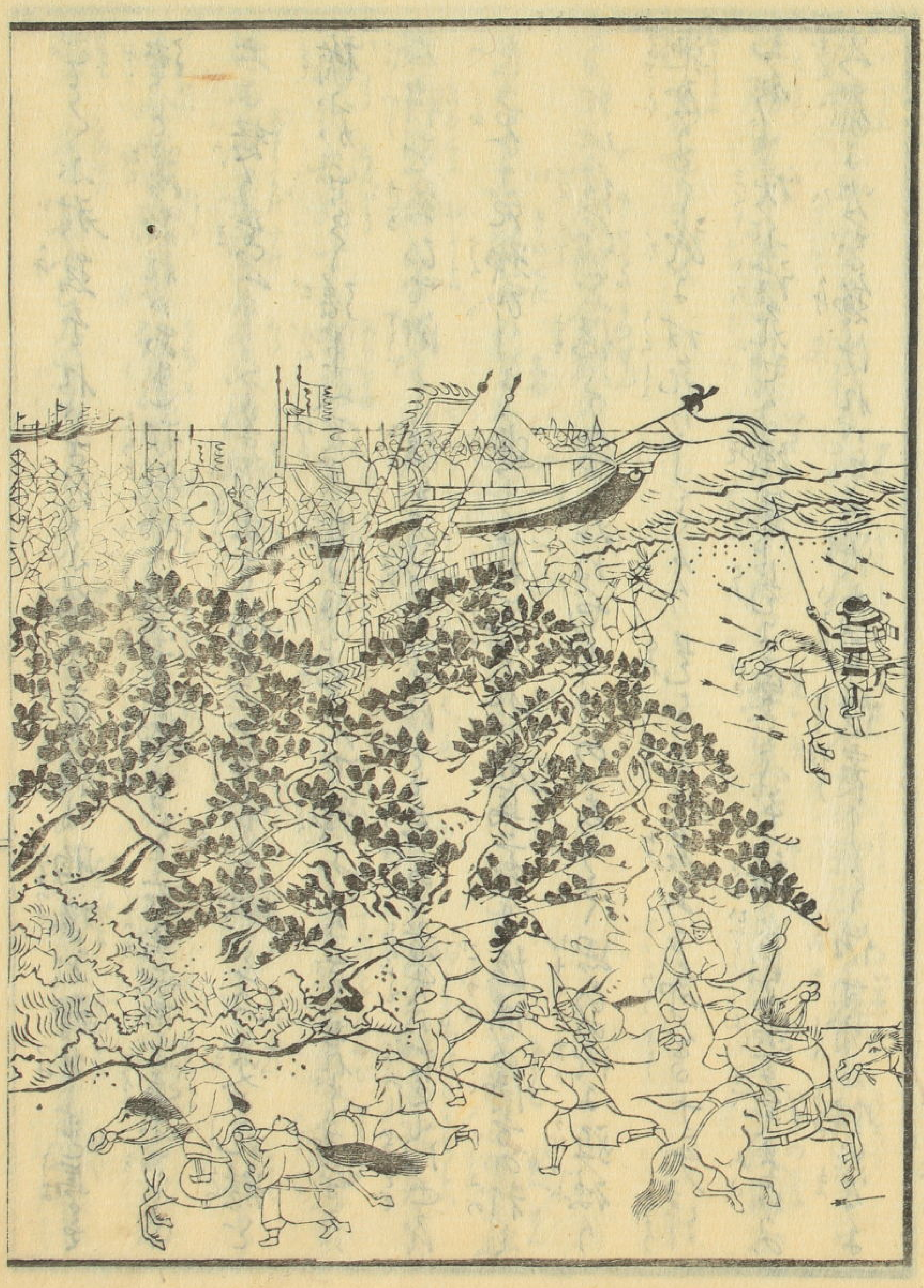
今年文永十一年正月亀山天皇御位を皇太子に譲らせ給ふ
同三月廿六日親王天津日嗣を継がせ給ひ後宇多天皇と
申奉る當今にて勇ましくける此年改元ありて建治元年と
改めらるべく文永十一年の春の頃より風聞して蒙古高麗らの

國々より加勢して數百萬の軍兵戦艦に乗つれて我國に押寄すべしと誰いふとなく沙汰しぬれバ都鄙ともに騒ぎけれバ禁廷よりは
諸社諸寺へ勅使を下されて異賊降伏の御祈祷あれバ仙洞
よりも院宣を下され大社ハ申に及ばず諸山の貴僧高僧
秘法を修し護摩を焚降伏すべく御沙汰ありけるが遂にバ
神佛の冥應もいかゞあるべきと頼母しくぞ覺えけれ扨も
蒙古の軍勢は十萬余人宋の残黨十萬人高麗の軍勢八千人
都合其勢三萬人梢工水手六千七百人合して三萬九千七百人戦艦
九百余艘に取乗十月を待て纜を解き出帆をぞ致しける處
十月五日の曉に對馬湊より見わたせバ沖の小嶋と見えぬるハ漕並べ

たる艦なりけりあはを騒がし後もなく佐須浦近くよせぬればすはや
事こそ出来にけれとて士民一時に騒ぎ立て急を告てひしめき
けるを地頭宗右馬允資國は兼て期したる事なれバ何かハもつて騒ぐ
色なく神速に軍勢を押出して海岸に備を立八千余騎の軍勢
の中矢継早の射手の精兵を撰み出し眞先に立並べしめ
堅固の備を設けつゝ使節をもつて敵船へ至り子細を糺問せんに
返答にも及ばずして無二無三に乗寄けるまゝぞ味方ハ何か猶豫
すべき矢比を揣へて引詰差詰散々に射かけゝれバ互に矢
當つて死する者の許多と數をしらざれども賊ハ多勢にて
跡より艦漕寄せて早一方より上陸し其處ハ敵鬨を揚ゲし散々に

戦かゝる敵の矢柄ハ短かうして弓勢も弱かりし紀で矢根に毒を
塗てありけれバかしこくも疵付けバ其毒やがて惣身に巡り腐り
たゞれて命を失ふことを憎むべき不業なりけり爰に之を知らぬ軍兵
あまた該毒にあたりて打ち挫けまで漂ふ敵ハ是に討死多く引き退き
ふぞ見えたりける懐良の子息宗右馬二郎是を見て太音揚て
下知をしく引に老も退かず空を引て何国まで逃まじ續く地方の
あらぬものを戦ふかくこそ爲れものなれと二尺に余る大長刀を
振まはし敵軍へ掛入て矢庭に敵四騎を斬て落し是を見て
右馬二郎の若子因八郎刑部卿ら三郎清次郎庄吉郎肥後國
藤井磯三郎等を始として究竟の勇士等必死になりて戦ひ

去り深みに多勢れ織徒等も開き靡きて海端へおし潰されし
海中へ落入て死するもの又数を知らざれバさしも多勢の虜軍なれバ
新手を入替て攻寄ちり殊に先年應對の時地形の言辞に
勝利を心につひに忘まじとて懐を報ぜんと競ひ勢ひて
責戦へども御方ハ寡き勢なれバ今朝よりの戦に疲れ労れて
雑兵等ハ多くあきたるて見えけるに懐良頼りに勇みて死をも恐れぬ
織徒等に後ろを見せて以ての外にて今の戦に打負てハまさに
日本の恥辱なりと先に立て進み出ると幸ひ斬られバ死骸ハ
積んで山をなし一筋の血は川をぞなしたりける織徒も
是に辟易して打ち靡きてハかなハじ乱後に對て雨の



資國合戦の図

ごとくに射懸ければさしもに猛き勇将も胸板を射付られ馬より
撞と落ければあまた打寄て頸寄る賊等を右馬二郎遠矢にて
太刀振りまはして頸来る賊徒を四方に蹴ちらして父が死骸を
楯にかづかせて後軍へ送らせる間も撰んで戦ひけれども御方には
大将を失ひて漸く後まの心をいだけども志ある者共は一足も引退かば
目覚しく戦ひして進みて打死すれば右馬二郎も後詰の御方の其の形を
見れば絶望を保たんや死ねやとのゝしりて思ひの侭に頸繞り
馳廻りて敵に討死したしける是を見て名ある郎等十六人は
おなじく枕に討死せり賊軍是に勇みたち雑兵を追立て朝の
人家に火を懸ければその火忽ち燒衰しく佐須浦は時の間に

灰燼とぞなりにける抑も賊徒は手合せの戦ひに大将を討取りて
打勝たる事なれば勇みいさんで英気を養ひ同十四日壱岐国に
押寄せたり

壱岐国合戦の事

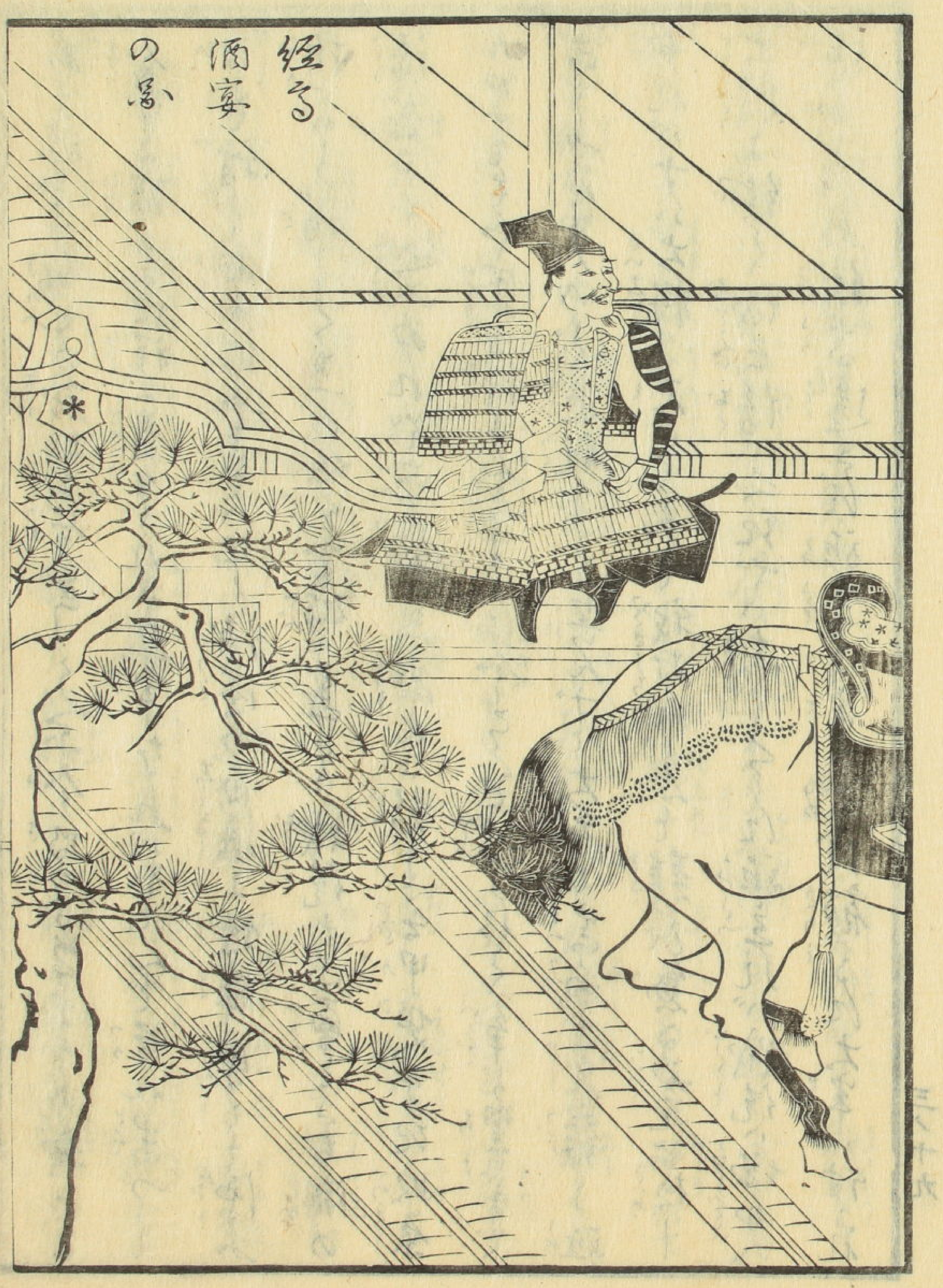
さても壱岐守の守護代平内左衛門尉経高は去る五日蒙古の軍船
対馬国へ押寄せて地頭宗右馬允を始めとし名ある武士数多討れて
一島残乱妨する有様を委細に聞得て早速筑前国守護少弐三郎
左衛門尉景資の方へ使船を以て告知せ賊徒頗る大軍にて既に
手合せの戦ひに討負ちて破竹の勢に相聞え候へば後詰の援兵あらん
事を希ふところなりとぞ申送りたる所にて防禦の軍策を巡らし

すでに用意して今やおそしと待懸けたるにあやしの海士船長
ら對馬の有様を聞傳へ守護の軍兵討負など賊徒の横逆乱妨に
財寶残なく集めとられし眷属らがうき目や見えむとさへ御方の
勢にも馳加はらず太刀打物の業は知らざれど礫を飛し打付て賊徒を
上陸させじと挑みくだりにて合せて家々に蓄へる錆力など抵
抗びし常にも陣中へ寄りけるまで守護代是を聞て大に悦び
合戦は猶以て人心和不和の基にありかゝる賤民漁者等までも一致
せしこそ頼もしけれ彼も妻子眷属を城中に籠め置て心安く接戦
させよと急ぎて九州へ注進の使を申遣はされけり此嶋に賊船の寄せ
来る毎に戦ひ初めて少なからぬ日あらんごとく援兵の軍船の来らん事を待

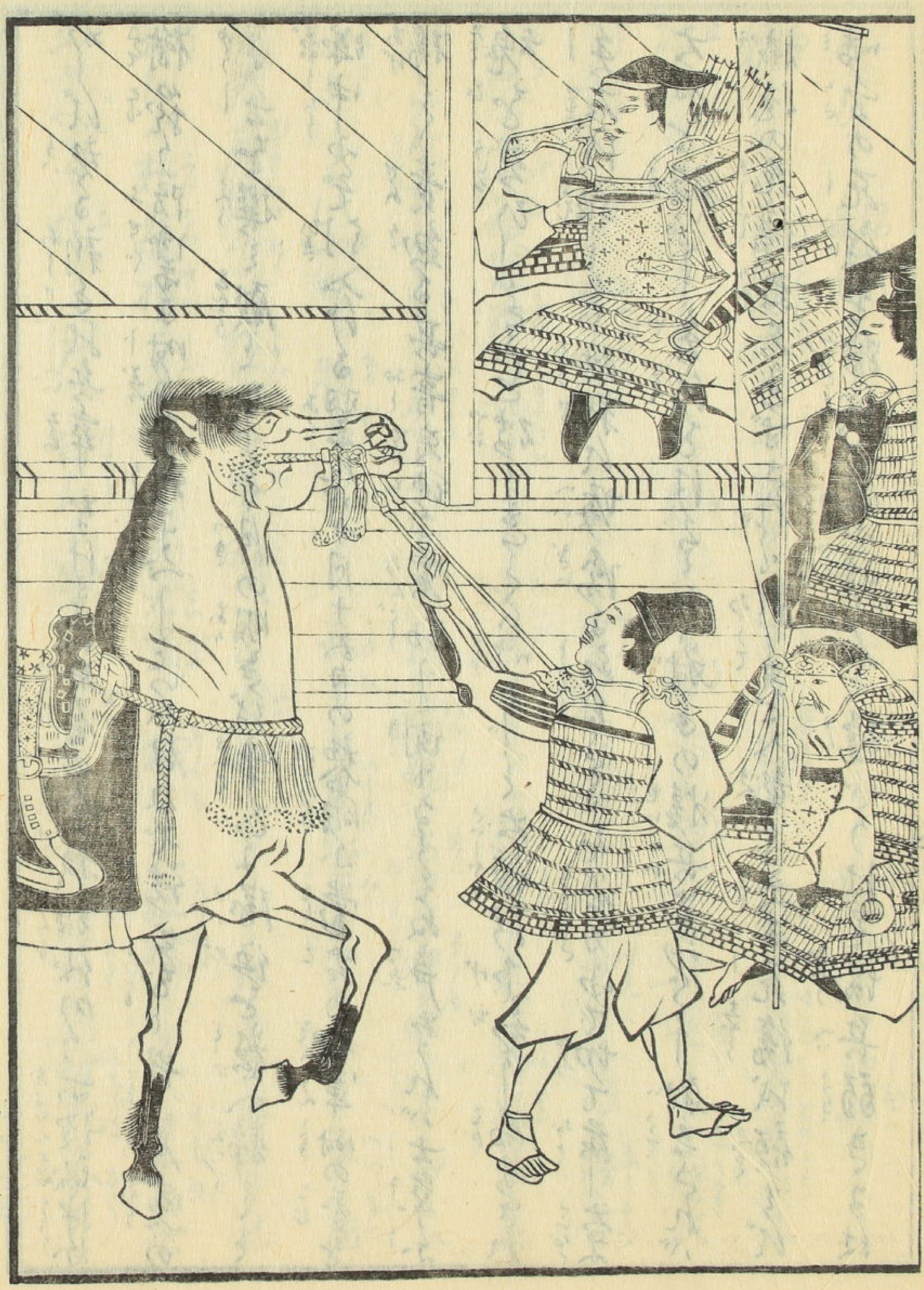
必定彼の海寇が力に依て此一浦を能く持ち賊軍を追拂ふ我が
悦び之に過ず更なり鎌倉将軍家への忠義甚懇切を尽す者に
莫大の恩賞を宛行はるべし勤めよやとぞ申ける御方の軍勢是に
機を得て武士は云ぬ船人漁者等にいたるまで若老をと勇みたち
まさしく面目有んやと早くも賊徒の寄来るを目覚しく待設けて
恩賞に預らんと勇み進んで待かけたる處に同月十四日蒙古れ
賊艘順風に帆を揚て壹岐嶋をさして押寄来り板木の浦港に漕寄せ
て船陣残なく布きたり待設けたる御方の軍兵海岸に備へ
其日にあまる賊船を物ともせず近寄りて射て取らんと矢種を
揃へて待受たる賊徒も先陣の船を寄せ矢軍をこそ始めけれ

たゞひとり殺傷あるまでも斬らくハ果しと賊軍を次第〳〵
漕よせて宇野手浦の浜を打続て其所を上陸せんと封る所を責めて
破竹の勢ひなりけるが斬まくりても討ても相もせず逃て上陸
後方を見て是に奮激して之を専途に戦ひ争ふ将卒
一致して鎬を削る元切先より火を出すばかり接戦すれば勝敗されど
見ざりき日も夕方になりければ賊徒ハ案に相違して屈し
侮りしに此小勢と物ともせず其日も軍を止めて兵を引
大将尉經は諸軍を率いて下知して申けるは今日の
戦ひに粉骨砕身してば大軍の賊に征伐して兵を
ふみへて遙く大声討取る賊徒も多けれど此方も討死の者も

かくて籠る新手此兵卒なりければ日合の合戦難儀なり長延城中に
楯籠り防禦事時日を移すべしといひければ諸士も尤と思ひ居たる
勇士を撰み殿となして月の明き我卒を隊伍を整へ静々と
城中にぞ引入ける翌れば十月十五日の黎明に蒙古の賊軍時の声を
揚て責寄る其音天地を震動し聞もすさまじき声なれば士卒に
魂を失ひしがこれを破られてハ叶はじと大将諸下知し扇をかざされ
し矢石を飛して防戦に塀際に取付たる者を長刀にて切て落し大木
大石を投かけ矢頃をはかりて射手の精兵さんざんに射立られば
賊徒の死傷数を知らずされども新手を入替て更に死傷に顧ずに
味方の死骸を踏越て乗破らんと攻かかりける城兵弱きまは



経基酒宴の図



あら猛しも昨日の戦ひに労れしに今朝つとめてよりの戦ひに
食する隙もなき紀綱に責付られる事なれバおもんど労れ果つゝも
日を稍々西に傾きてハセノ浦濱の白浪に余輝香ゞと漂ふ
折から惜しくも一の城戸を破られてら賊徒大に勇みたち潮の
涌がごとく込入ぬれど平間ねがつ尉太に怒り云甲斐なき奴原
かなもちや軍も終らんとするに今こそと破られてく争ぎ翌日まで
支へし座勇のくぐ追散して呉んずと太刀まつ向に差翳し迎
あれバすかは大将と見えつるぞ我打取んと競ひ懸る必死を極し
大将に続く城兵後るゝな紀やハ走しくられ踏立れバ賊徒ハ堪かねへ
追おさされぬ経さる透をさず踏立く手の者顧るに大半ハ討れ

たまらず急ぎ士卒残らず手勢おく城戸を差固めさら遠有し
程に如何ハしけん東する矢倉の蔭より黒烟つむら立ちのぼるを
見えつるが忽ち火光天を衝き炎々と城より燃揚れバ城兵あきれて驚きて
火を救はんとする隙に賊軍是に力を得てそれ懸軍を討あうぞ
なりと大手の城戸を打破りつゝ乱入せり経る心もなく急に取り
二三の城戸も破られし賊徒の勝に乗ちるし大八追て正に今ハ
かくしと心静に老党を呼集め最後の酒を呑みしぞ賊敵を
兵人も多く討死して残るの衛の士を追と秘蔵の名ある打物
て激き立る敵中へ駈入バ恩顧の老党共が鋒を並べ駈入
当るを幸ひ斬立れバ賊徒を散々に駈破られ死骸を算を乱して

左右へぱつと開きける此隙に遁るゝハ本丸へ逃去く物具脱捨て踐
一文字に撞切れバ若黨是を介錯しく遠へ忘人心殘しば
因じ枕に神らけ敵軍太に振びて城の門前に小陣をふりく今朝
よりの戰ひの労れ全で休めける折柄果敢を殘兵ふして哀情の
心に傷けれども男を捕へてハ揃ひ殺し女どもを捨めてハ掌に充を穿け
紐を貫して一緒に括り舩端に結びつ事老弱の差別も汎く未然ふ
ものた壱人も殘さん殺擄せしまま様ハ暴虐無慙の事ども也

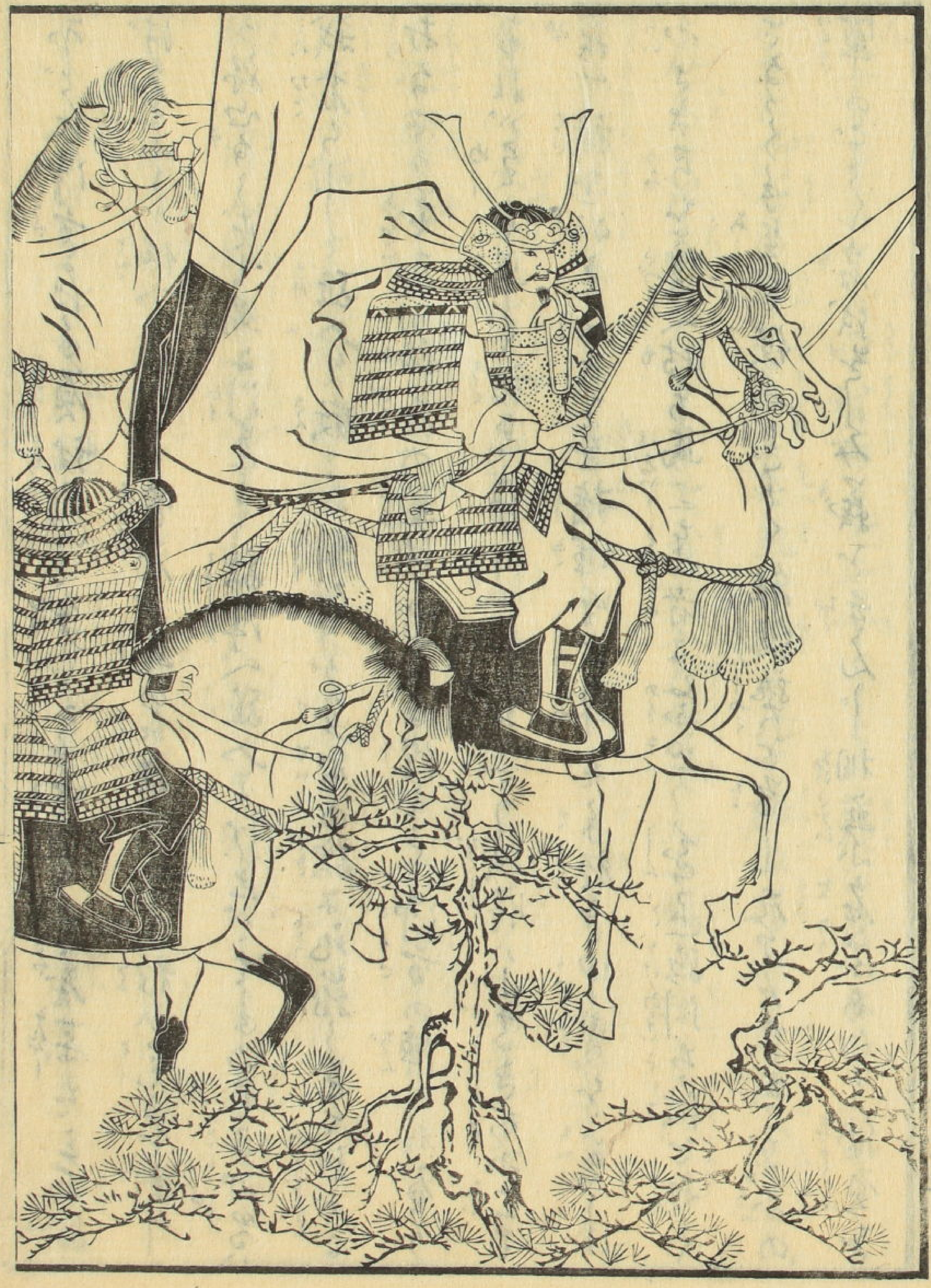
今津浦合戰の事

扨も九州ふおて對馬壱岐の注進を聞く援兵の沙汰にお及ぶ所ぞ賊
徒が鋒甚だ出く一日殺らちに對馬を掠紀余んで壱岐を責

落し大將が打おふく糧城を震ふやしかれが今又ふ援兵に及ばん
此旨京鎌倉へ注進して何國の浦に寄せ來るも知らぬ合戰と
遠び兵糧不足なれし急く討んと沿海の守護地頭を
うけるを番ぐ待設らり去程に十月十九日の日も立處に及え隠まする
折摘ふ烈しき風を十分に帆に揚げる帆に腹ませて舳先を操へ波
を割て海もぞろふ騒き來り筑前國今津の浦沖合に船ぞ繫ける
來り是を見るより蔵京從早馬の使者を以て鄰國の守護
地頭へ告知らせれが秋月原田松浦黨洵粋ぞ次紀伊の一族等
を始めとし為手の他手人々皆の人数ハ悉く及ばん神社佛寺の神職寺院
百姓商買の者まで日本中の合戰なれば我もと命をすて一

取なり四海へ地卒をあつめられるところ〳〵我も〳〵と追々に馳集り
海辺に備を立て家々の紋所打たる旗楯手楯透間もなく衛
ならべく敵方の射手を先陣とし賊軍の艦に見くだし悪く射て
取んと矢衾を揃へ面々矢頃の所に篝を焚つゝ夜の明るを遅し
と待恐ける明れば廿日の朝朝日もまだ見え渉あさらけ山の端によりも
はへぬけり蒙古の賊船前陣を布連ねて一同にひし〳〵と漕ぞ寄せ
相図の太鼓を打ならせば先陣の賊船一方を漸々て赤き旗を差揚
喇叭を吹立て鉦をならし銅鑼太鼓を打立れば賊の惣軍是に応じ
て打立る其音は海潮に響ぎ渡りて坤軸も崩るゝごとく震動
すれば国も慄るゝ浅方の馬ども驚き跳り狂ひて騎馬の武士ども

押ひしね陣列散々に乱まくり賊徒の先鋒是に機を得けん隙間も
なく上陸れさりしに勇み立たる御方の軍勢大に怒て憤り何かは
猶豫をいたすべき射手の先陣もあらざこと我早り雄の若武者大隊伍
揃えぬ備ながら或は一手あるひは二手おもひ〳〵に衛く懸れバ賊徒は
陣を鶴翼に備へ両端を回して一手〳〵を引包て洩さじと攻戦ひ
けるに暫時間戦隔つる時は隙間もなく毒矢を射かけ鉄炮に火を
あやげて空を飛して打鳴る其音虚空に鳴動して雷のごとく
ひゞき渡り是に觸るゝ兵は如何に勇猛の者なりとも忽ち慴り
命を落しまり我国にて見も知らぬ軍器にてかゝる奇術のある
事とは思ひもあへぬ事なれば士卒肝を寒しける所とし



丹鶴叢書中
武房高名
の図

あれども御方は手負討死して多く其中にも青屋某とて三百騎
ばかりを引具し備へたりしが青屋が馬の口強くして狂ひ出るを制し
かね心ならずも馬に引れて敵陣へ駈入りければ其手の家子郎等ら
我劣らじと駈入りて散々に戦ひしが多勢の敵に取籠られ残りなく
打たされ青屋が秘蔵の馬ばかり血に染みて御方の陣にかけ戻り
帰れば主も早く討れてけりと知られて御大将は小高き所に上り
居て旗を以て士卒を指揮す士卒も手綱き甲冑をも着し
小さき旗を指物へ持ち馬上達者に乗まはり進退駈引き采配を打ち
さながら手足を使ふがごとく能く錬熟を為したれば自づから其の
軍のごとく名をしみ義を守んじ相互に名宗あひ〳〵勝負を

決するをりハなく必ず討取らんと皆一同に競ひ勇みて奮戦せり去る
ゆゑに御方の軍勢殊に英気を撓まれて隊伍掻乱し堅陣に駈悩むを
されども起立て見えけるを少弐大将貫恵大に怒り摑き御方に
有様を是非なき事とや其の奇術に掛けまて引け色になる事やある年老
たりとも入道が軍兵杖を続くべしやと大音に罵詈て打物
打振り面も振らず敵中へ駈入て薙立て接戦も流石に名を得し
老将の獅子奮迅の勢ひは比類なき挙動なればいかんぞ賊徒を
敵し得ん散々に討破られなだれ懸つて敗走して遠矢をぞ
射かけける其孫十三歳なりけるが矢合の小鏑を射懸けまで賊徒
大に嗤ひ去れども若年なれ其働は御方に挙て感じあへり扨も

御方にて毒矢奇術を顧ず秋月戸次松浦原田の御家人地頭
いづれも英気を奮発し一揉にもみ潰さんと手痛く挑み戦ひ
けるが中にも松浦党多く討れ原田の一族も深田へ落入不覚を
とぞ取りける肥後国の御家人菊池次郎武房ハ紫逆沢瀉の鎧に
着し葦毛の馬の太く逞しきに打のり紅の母衣懸て赤坂辺
小松が原に陣をとりて支へたりしが異賊廻雲霞のごとく寄来て百騎
ばかり二手にわかれて敵陣さして駆入り賊徒包んで討んと
すれば御方ハ切て撥んとせしかれども敵ハ大勢なれば郎等若党多く
討れせて今を最期と見えける所に武房ハ少もひるまず異賊の
陣を竪横に駆破くまゝ其勢ひに辟易して一筋の血路を開きたり

得たりやおふと武房ハ精神益奮激し賊徒の首を手づから二ツ
取りたり太刀と長刀の先に串きつらぬき掲げ従者に持せ静々と
引返せしが山田某が若者ども五人計戦ひ労れて異賊に追立られ
赤坂を下へ逃延びけるが敵ハ大追かけたる所を遁れ得ずして逃去り
僅一町あまりも隔ぬれバ追付し異賊等ハ力及ばじとおもひけん
尻を捲上げこなたへ向つてごつて叩て踊りける山田が若者是等
を見るにさても口惜し紀次郎守綱ハ身が嘲弄せらるゝハ敵ながら
無念なり最早きたりと思ひ去りてせめて見んずと其中なる精兵の弓矢
手挟て矢頃を計るに遠く隔ぬれバ射当つ事難しとぞ思
ひければ去ば一心に祈誓して南無や八幡大菩薩願くバ此矢

敵に當させて武藝の秘術を尽させけるに念じいかりふかり
あれバ甚だ深くゆき當の敵にはつしと射付て忽ちに死でけり御方の
勢を是を見てあら心地よし氣味よしとて一度にどつと咲ひけれバ
是賊ハ無手も叶はれけん死骸を捨て捨てにげくに逃去ぬ
小貳三郎并に舎弟厨所資等に源四郎入道も先に出むかつ等を始め
として我もくと粉骨を尽し戦ひしかども賊徒も流石に豪傑の
面々せあるく今津佐原百道赤坂あたりまで乱入り初め民家の
賊船どもしや追寄せ来るも何れかの事かあらんとあくまで
偏に沖かけして妻子眷属何くれと手傳にして百姓原も我もくと
御方の陣所へ馳集りしに思ひの外賊軍いたく手強くして所々に

上陸し家々に侵し入て妻子財寶を奪ひ乱妨狼藉に暴乱しそが
中にも火を放ち焼立てるも有ければ横逆不道の振舞をて目も當られ
ぬ有様なりけり

蒙賊記第三終

魁花堂
武州北埼玉郡行田町四十番地